

## まえがき

本書はアフリカの武力紛争を扱っている。しかし、本書の執筆者は、いずれも紛争問題の専門家とは言い難い。7名の執筆者のうち私を含めた4名はアジア経済研究所に所属する（あるいはかつて所属した）アフリカ研究者であり、政治学や経済学など社会科学を専門領域としている。残る3名はアフリカをフィールドとする人類学者であり、もともと紛争問題を専門に研究していたわけではない。

このようなメンバーで「アフリカの紛争」に関する研究会が組織されたことは、それ自体、アフリカの紛争をめぐる今日的状況を物語っている。すなわち、今日のアフリカにおける紛争は、その地域に関わる研究者が否応なく直面せざるをえない現実の一部を成しているのである。調査地で内戦が勃発したり、友人が戦闘に参加したり、あるいは自分自身が暴動や内戦に巻き込まれたりといった経験をもつアフリカ研究者は、本書執筆者のなかの数名を含め、近年かなりの数にのぼっている。

こうした状況を背景として組織された研究会の成果である本書は、研究者が特定の方法論を習得した後に分析対象としてアフリカの紛争を選んだ成果というよりも、地域の苛烈な現実直面して醸成された問題意識が先にあり、その解明を目指して苦闘するなかから生まれた成果といえる。その意味で本書は、第一義的に、地域研究の立場からのアフリカの紛争への接近である。

\*

現場で得た具体的なデータに立脚する地域研究者にとって、紛争は決して扱いやすいテーマではない。とりわけ本書で対象とする国レベルの武力紛争など、フィールドで実際に経験することは稀であり、また経験から直接得られる情報も限られている。

しかしそれでも、私たちはこの問題に取り組みたいと考えた。その動機は

研究会に参加した各人によってさまざまであろうが、私に関していえば、コンゴ共和国で偶然垣間見ることになった武力紛争に対して、何らかの形で「おとしまえ」をつけたかったというのが大きな理由である。1992年に赴任したコンゴ(ブラザヴィル)で私が遭遇した内戦は現在もなお継続し、国土に甚大な被害を与えている。友人たちの消息も知れない。本書で直接コンゴの紛争を取り上げることはできなかったが、アフリカ各地で起こっている同様の事態がいったい何を意味しているのか、それを考えてみたかった。

私たちは地域研究者としてアフリカに関わり続けてきた。紛争のあるなしにかかわらず、これからもそこに関わり続けていくことだろう。武力紛争は地域研究者が得意とするテーマでないかも知れないが、逆にこうした私たちにしか書けない「紛争論」もあるのではないかと、そう考えて本書を世に問うことにした。

\*

本書は、直接的には、平成10年度にアジア経済研究所で実施された「現代アフリカの政治変動の内在的要因」研究会の成果である。この研究会は、平成9年度の「90年代アフリカにおける政治変動とエスニシティー」研究会から継続して実施されたものであり、その意味で本書は実質2年間にわたる研究会の最終成果であるとともに、前年度研究会の成果である中間報告書(武内進一編『現代アフリカの紛争を理解するために』)の延長線上に位置している。また、アジア経済研究所の出版物『アジア研ワールド・トレンド』平成11年3月号(特集:アフリカの紛争問題)やその企画のきっかけとなった平成10年度アジア経済研究所夏期公開講座「現代アフリカの紛争を考える」などは、いわば研究会の副産物であり、本書をまとめるための重要なステップになった。

この2年間、予想以上の深さと広がりをもつこのテーマと格闘しながら、何とか成果をまとめ上げた。私たちの「紛争論」へ向けた一歩として本書の試みが成功したか否かは心許ない。各方面からご意見、ご叱正をいただければ幸甚である。

研究会の実施と本書の取りまとめにあたっては、執筆者の皆さんをはじめ、

研究会にオブザーバー参加をいただいた丹埜靖子，林晃史，平野克己，望月克哉，高根務，牧野久美子，早瀬保子，吉田栄一の各氏，そして事務的な事柄で石橋利夫氏に大変お世話になった。記して謝意を表したい。

1999年12月

武内進一